

## 「秩序ある生活」

2005.6.5 赤羽聖書教会主日礼拝説教

25. 処女のことについて、私は主の命令を受けてはいませんが、  
主のあわれみによって信頼できる者として、意見を述べます。
26. 現在の危急のときには、男はそのままの状態にとどまるのがよいと思います。
27. あなたが妻に結ばれているなら、解かれないと考えてはいけません。  
妻に結ばれていないのなら、妻を得たいと思ってはいけません。
28. しかし、たとえあなたが結婚したからといって、罪を犯すではありません。  
たとえ処女が結婚したからといって、罪を犯すではありません。  
ただ、それらの人々は、その身に苦難を招くでしょう。  
私はあなたがたを、そのようなめに会わせたくないのです。
29. 兄弟たちよ。  
私は次のことを言いたいのです。  
時は縮まっています。  
今からは、妻のある者は、妻のない者のようにしていなさい。
30. 泣く者は泣かない者のように、  
喜ぶ者は喜ばない者のように、  
買う者は所有しない者のようにしていなさい。
31. 世の富を用いる者は用いすぎないようにしなさい。  
この世の有様は過ぎ去るからです。
32. あなたがたが思い煩わないことを私は望んでいます。  
独身の男は、どうしたら主に喜ばれるかと、主のことに心を配ります。
33. しかし、結婚した男は、どうしたら妻に喜ばれるかと世のことに心を配り、
34. 心が分かれるのです。  
独身の女や処女は、身もたましいも聖くなるため、主のことに心を配りますが、  
結婚した女は、どうしたら夫に喜ばれるかと、世のことに心を配ります。
35. ですが、私がこう言っているのは、  
あなたがた自身の益のためであって、あなたがたを束縛しようとしているものではありません。  
むしろあなたがたが秩序ある生活を送って、ひたすら主に奉仕できるためなのです。
36. もし、処女である自分の娘の婚期も過ぎようとしていて、  
そのままでは、娘に対しての扱い方が正しくないと思い、  
またやむをえないことがあるならば、その人は、その心のままにしなさい。  
罪を犯すわけではありません。彼らに結婚させなさい。
37. しかし、もし心のうちに堅く決意しており、ほかに強いられる事情もなく、  
また自分の思うとおりに行なうことのできる人が、  
処女である自分の娘をそのままにしておくのなら、そのことはりっぱです。

38. ですから、

処女である自分の娘を結婚させる人は良いことをしているであり、  
また結婚させない人は、もっと良いことをしているのです。

## 説教

人間の家庭は、神さまが創造なさったものとして、本来すばらしいものでした。人類最初の家庭は、神さまに祝福されて(創世記 1:28)、この上なく最高にすばらしく、良い家庭でした。「見よ。それは非常に良かった。」(創世記 1:31)とあります。「生めよ、増えよ、地を満たせ、地を従えよ、生きとし生けるすべてのものを支配せよ。」と神さまは最初の家庭に命じられました。このみことばが示す通り、最初の家庭は、生命力にみなぎり、生み、増え、地に満ちて、自分たちのみならず、生きとし生けるすべてのものに祝福を与えんとする勢いに満ち満ちていました(創世記 1:28)。

しかし、人が、神さまのみことばに背いた時から、家庭も神さまの怒りを買って呪われてしまいます。宗教改革者マルチン・ルターは言いました。「ああ愛する主なる神よ。結婚は尋常一様の事柄ではなく、神の賜物であり、最も甘く、愛すべく、しかり、最も貞潔な生活であり、すべての独身生活にまさる独特の生活である。うまくゆくなら結婚して生活せよ。しかし、うまくゆかなかったが最後、結婚生活は地獄だ。」「幸福な結婚生活ほど天国に近いものはなく、不幸な結婚生活ほど地獄に近いものはない。」

このルターのことばの意味する通り、人間にとって、結婚することが、必ずしも幸せにつながるものではなくなってしまいました。うまくいけば天国だが、うまくいかなければ地獄だ、結婚とは決して「尋常一様の事柄ではない」、むしろそれはただひとえに「神の賜物」である、だから、うまくゆくなら結婚してもいいが、そうでなければやめた方が良く、と言うのです。すでに学んだ通り、結婚は本来すばらしいものでした。人は、家庭に於いて、神さまの祝福を十分に味わいました。しかし、人が神のことばに背いて家庭が崩壊してからは、人はむしろ家庭に於いて地獄を味わうものと化してしまったのです。これは、何という不幸なことでしょうか。使徒パウロ自身の表現で言えば、「それらの人々は、その身に苦難を招くでしょう。」(コリント 7:28)となります。このさらに詳しい意味は、「結婚する人々は、その肉に苦しみ、悩み、問題をずうっと持ち続けることでしょう。」という意味です。人の家庭は、それを構成する人の罪の故に、単にそのままでは、悩み、苦しみ、あらゆるトラブルの温床と化し、日々襲い来る地獄の苦しみを味わうものに成り果ててしまったのです。もしも神の御子イエスキリストの十字架の血によって罪を贖っていただかなければ、家庭は、人の罪の故に、神さまに呪われた家庭です。血生臭い地獄を味わうところです。来るべき神の最後の審判の前味を味わうとなってしまいました。

それで、使徒パウロは、人の結婚に関して、それほど積極的な考えを示してはいないのです。「たといあなたが結婚したからといって、罪を犯すわけではありません。」(コリント 7:28)「処女である自分の娘を結婚させる人は良いことをしている」(38)そして、「妻に結ばれていないのなら、妻を得たいと思っはなりません。」(27)とも言います。結婚する「人々は、その身に苦難を招くでしょう。私はあなたがたを、そのようなめに会わせたくないのです。」(28)とまで言うのです。

こうした使徒パウロの結婚観の背景には、人の墮落という事実があります。御子イエスキリストの血によって罪を贖っていただいて、確かに、人の結婚ははじめて有効なものとなり、その本来の良さを回復しました。しかし、とは言え、人の弱さの故に、すなわち、イエスさまを信じて後も、キリスト者にまわりついては日々戦いを挑んでくる罪の故に、結婚が必ずしも人が選択すべき幸福の道とは言えないのも事実です。私たちは、キリスト者になったからといって、もうかつての罪深さがすべて解決したというわけではありません。勿論、キリストの十字架によって、私たちの罪の責任は、贖われて、解決し、終わりの日の審判は免れることにより、罪

に対する究極の勝利を得ました。しかし、その終わりの日までは、私たちは、かつて決別したはずの罪と、死ぬまで戦い続けねばなりません。私たちがせっかく得た救いの座から引きずり落とそうと日々攻撃してくる悪魔の惑わしと戦い続けねばなりません。だから、洗礼を受けてキリスト者になったからといって、それでも罪を犯さなくなるというわけではなく、全体的に見れば、つまり最終的に見れば、罪に完全に勝利することは間違いないとしても、局地的には、あるいは一時的には、あるいはこの世に生きている間は、悪魔に惑わされて罪を犯して呪われることもあるのです。

このため、キリスト者が、婚前交渉や浮気をして罪を犯してしまうこともあるし、結婚がうまくいかず離婚してしまうこともあります。(勿論、罪を犯した場合は、教会の戒規に服さねばならないが.....)

キリスト者というのは、救われて、もう罪を犯さなくなる人のことではありません。そうではなく、キリスト者というのは、救われて、(かつての相棒であった罪と完全に決別して)罪と戦う人のことです。キリスト者の人生は、戦争です。悪魔との全面戦争です。血を血で洗う、全面抗争です。だから、時には、悪魔に負けることもあるし、その結果、神さまに呪われることもあります。しかし、そのままには終わらず、倒れても、また立ち上がって、なおも前進していくのです。キリスト者というのは、何か完成した者ではなく、完成途上にある者です。

だから、結婚がうまくいく人もいるし、そうでない人もいます。そして、たとえキリスト者でも、結婚すれば、どの家庭にも必ず襲い来る試練が、やはり襲いかかって来ることは間違いありません。キリスト者の家庭だから災いが降りかからない、ということはありません。キリスト者の家庭といえども、災いが降りかかるのです。そして、試練が襲いかかって来た時、それに耐え得る人もいるし、耐えきれない人もいます。

そういうことを考えると、使徒パウロは、結婚する道だけが必ずしも幸せだとは考えません。むしろ独身の道を貫く方が「立派」(37)であり、「もっと良い」(38)、と言うのです。

独身は、独身なりに悩みがあります。それで、パウロは、「もし自制することができなければ、結婚しなさい。情の燃えるよりは、結婚する方が良い」(7:9)とも言いますが、しかし、同時に、「私の願うところは、すべての人が私のようなことです。」(7:7)「結婚していない男とやもめの女に言いますが、私のようにしていただけるなら、それでよいのです。」(7:8)とも言っています。つまり、決して無理して結婚する必要はない、人には各々弱さがあるために、結婚したくてしょうがない、「情が燃え」て、結婚を熱望してやまない場合は、結婚してもよいが、そうでなければ、何も無理して結婚し、結婚の災いを身に受ける必要などないのだ、と言うのでした。このことばの通り、使徒パウロは独身でした。勿論、カトリック教会のように、結婚するよりも独身の方が優れていると、意味なく独身を賛美するわけではありません。独身者が既婚者より優れているということもないし、既婚者が独身者より優れているということも、断じてありません。

使徒パウロがここで言いたいのは、結婚するにせよ、結婚しないにせよ、大切なのは、それぞれが神さまから与えられた「召し」(7:7,17-24)だ、ということなのです。「ひとりひとり神から与えられたそれぞれの賜物を持っているので、人それぞれに生き方があります。」(7:7)

この点に関して、イエスさまも言われました。イエスさまは、結婚しないということに関して、

しかし、イエスは言われた。

「そのことばは、だれでも受け入れることができるわけではありません。

ただ、それが許されている者だけができますのです。

というのは、母の胎内から、そのように生まれついた独身者がいます。

また、人から独身者にさせられた者もいます。

また、天の御国のために、自分から独身者になった者もいるからです。

それができる者はそれを受け入れなさい。」

マタイ 19:11-12

ここでの「独身者」とは、ギリシア語「ユーヌーコス」で、コリント七章のことばとは違います。この語は、字義から言えば、「去勢された男子」の意味で、「宦官」（使 8:27）と訳される語と同じです。主イエスは、「独身者」となるよう導かれている者を、次の3種類に分けて説明している。第1は、生来、身体的な障害を持っていて結婚できないもの、第2に、「人から独身者にさせられた者」、すなわち当時の宮廷の寝室に仕えていた宦官のように去勢された者、第3は、神のみわざのために専心奉仕するために献身した者（参照 コリ 7:32-35）です。

人には、それぞれ、神さまの召しと賜物があるのです。

そして、独身者にしても既婚者にしても、肝心なのは「秩序ある生活を送って、ひたすら主に奉仕する」ことだと言います。

**35 . ですが、私がこう言っているのは、**

**あなたがた自身の益のためであって、あなたがたを束縛しようとしているものではありません。**

**むしろあなたがたが秩序ある生活を送って、ひたすら主に奉仕できるためなのです。**

「秩序ある生活」とは、直訳は「美しい姿で」で、倫理的な善悪の区別はありません。「つつましく」「品位を保つ」「ひたすら主に奉仕する」とは「～から」+「引き下がること」+「なく」の合成語「一心不乱に美しく傍らに座を占める」の意味です。そして、それが「秩序ある生活」であり、そうあって欲しいと願っているのです。結婚しても、結婚しなくても、神さまの召しを見失うことなく、主の傍らにどっかりと座して、主と共に歩む、それが何より大切なことなのです。この意味に於いて、結婚も、独身も、優劣はありません。

結婚しているから独身者より罪を犯している、ということもないし、独身だから既婚者より肩身が狭い、ということもありません。どっちが清くて、どっちが汚れている、ということはありません。独身でも、心乱されて、神に背いて生きるなら、それは「美しく」なく、結婚しても、相手のことに気を遣ってばかりで、主に心向かぬなら、それも「美しく」ないことです。

大事なのは、召命です。神さまの召命です。そして、神の召命に誠実に応えて、生きることです。

ここに集うみなさんひとりひとりが、たとえ結婚しているにせよ、独身であるにせよ、神さまの召しを見失うことなく、一心不乱に、神と共に歩み、神の御意志を行って、神の栄光をあらわして生きていかれるよう、主の御名により祈ります。